

# みさき百科

—大川とその周辺の自然と社会—

2014



「みさき百科」編集委員会（編）

# 目 次

はじめに	3
寄稿	
地域再生の「知」のエネルギー — 「みさき百科」の刊行に寄せて— 京都大学東南アジア研究所 安藤和雄	5
第1章 美崎の歴史	9
第2章 美崎の特産物	15
第3章 大川にすむ魚たち	19
第4章 大川の水草と植物	23
第5章 大川周辺に飛来する鳥たち	33
資料編	
資料1. 旧野洲川南流河口部の移り変わり	38
資料2. 水質データ	39
資料3. 年表にみる美崎の歴史	47
おわりに	52

## はじめに

このささやかな冊子に「みさき百科」というタイトルをつけました。美崎の自然、産業、生活、歴史などを網羅し、地域への理解とふるさと意識を高めていただきたいとの願いを込めました。同時に、豊かな資源に恵まれたこの地への社会的関心を高め、守山市北部地域の発展に寄与したいとの思いもあります。

ところで、この「みさき百科」を編集することにしたきっかけは「何か」です。美崎では数年前から大川の環境改善への取り組みをはじめましたが、この取り組みを進める中で今まであまり知られていなかった知識や情報が蓄積されてきました。大川の植物や生物の知識、水質のデータ、美崎の歴史、大川や地域に関心を持つ人々とのネットワーク、そして地域の将来への夢などなどです。こうした知識や蓄積を記録して多くの人達と共有したい。その上で大川や地域の将来を語り合うきっかけにしたい。また子ども達には自然や社会のおもしろさを知ってもらい、この地へのふるさと意識を深めてほしい。こうした思いが積み重なり、この「みさき百科」を発行することとなりました。

地域社会（「コミュニティー」と言う方が分かりやすいでしょうか）は今、助け合いや支え合い、安心安全の子育て、魅力あるまちづくりなどの分野でその役割と価値が再認識されています。そのためにはまず地域への理解が共有されることがはじめの一步ではないかと思われます。このささやかな冊子はその役割の一端を果たすことを願っています。

なお、第4章は元速野小学校長で植物研究の分野でも多くの業績をあげられた故中村一雄先生の著述資料をご遺族のご了承を得て掲載させていただきました。先生は大川の水草や周辺の植物についても貴重な調査資料を残され、大川の環境保護に多大のご貢献をいただきました。多くのご指導をいただいた今は亡き中村一雄先生に深く感謝しますとともに、先生のご冥福をお祈りいたします。また、一部資料は守山市民新聞に掲載されたものを転載させていただきました。記してお礼を申し上げます。

「みさき百科」編集委員会

## 地域再生の「知」のエネルギー —「みさき百科」の刊行に寄せて—

安藤和雄（京都大学東南アジア研究所）

自分たちの暮らす地域を知ることとはそれだけで、地域を主体的に変えていこうとするための原動力の源になります。「みさき百科」が刊行されていくことは、この点でまさに画期的なことです。発刊おめでとうございます。

世は無常です。好むと、好まざるとかかわらず、社会は変化しつづけます。約 2500 年前に釈迦はそれを悟りとして説きました。農村開発や農村発展、地域再生や活性化とは、この無常な世、自分たちが暮らす社会を意識的に変えていくことだと私は考えています。したがって重要となるのが、誰の、何のために社会をある方向に向けて変化させようとしようとするのだ、ということになります。

日本の地域振興においては建前としての住民参加が徹底しているので、このことはあまり議論されてくることがなかったのですが、バングラデシュ、インド、ミャンマー、タイなどのアジア諸国やアフリカ諸国では、農村開発が国際援助、つまり、政府や NGO などによるトップ・ダウンのプロジェクトで実施されていることが多いのです。そして、残念ながら 1980 年代にはいると、それまでプロジェクトはプロジェクト実施期間にはうまくいくがその後は、活動が持続されていない、とか、貧しい人々はプロジェクトの恩恵を受けているのか、という問題が明らかとなりました。誰のためのプロジェクトなのか？ 誰がどんな情報にもとづきプロジェクト計画を作ったか？ ということが盛んに議論されるようになりました。そこから、プロジェクト計画作成のための調査、作成、運営は住民参加で行うべきであり、それも住民の主体的参加によらなければならないというように、国際援助の世界では議論がすすみ、それは今では農村開発関係者にとっては「常識」になりつつあります（ロバート・チェンバース 2011：261－296 ページ）。

一方日本においても、農村の都市なみの発展を目的に農村開発や地域振興政策が住民参加で実施されてきたにもかかわらず、農村部、特に中間山地農村での過疎化、高齢化の状況は加速されるばかりでした。そのような状況下で、当事者的な反省がおき、都市に目を向けるよりも、自分たちの住んでいる農村の良さを積極的に評価し、そこに暮らしてきたことに誇りを持つ、楽しく生きようということが 2000 年前後から議論されるようにな



り、地元学が提唱されるようになりました。農村に暮らす当事者性を自覚したアプローチです（結城 2011：1－23）。

私自身も 1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて国際協力事業団のバングラデシュの農村開発援助プログラムに長期・短期派遣専門家としてかわり、そこで、在地化による農村開発というアプローチを提唱しました。在地とは暮らしている場、つまり、村と考えてもらっても差し支えありません。在地の技術、在地の知恵を学び、下絵と無関係に新しい事業という修正を乾いた絵の上に塗り付ける油絵的展開方法ではなく、水彩画的に下絵に馴染ませる、つまり、村にある技術や知恵を学ぶことでそれを土台とし、それに親和性をもたせる開発事業の展開方法です。馴染むという作業は村人の主体性が可能にするプロセス（事業の在地化）ということになります。

国内外の農村開発アプローチに明らかなように、村に暮らし、開発に対する主体的な活動を行うためには、知的エネルギーが不可欠です。それは外来の理論や知識ではありません。村で暮らし、村の歴史や出来事、経験を知として認め、しっかりと記録し、伝承していくことにあります。その作業によって、ますます村に暮らす意義が自覚されることになることでしょう。

これまで、合併などの区切りの年などを記念にした、地方自治体による村誌や町誌、市誌、自治会が音頭をとった集落誌のようなものが刊行されてきました。こうした「地誌」と「みさき百科」が異なるのは、前者は教育委員会や大学の教員が中心を担うことが多く、「完成」が目指されますが、「みさき百科」は、まさに美崎のみなさん自らが美崎に継承されてきた記録や経験、知恵などを収集し、発表し「知識」として形を与えていくこと、「百科」として不完全であることが重要なのです。不完全であるから、継続しつつ、「完全」を目指していく作業なのです。その作業が美崎に暮らすことの意義をみなさん自身に考えさせ、新たな意義を発見していく契機となっていくことでしょう。「完全」に到達してしまうことに意味はありません。そこに歩いていくことが重要なのです。仏教の悟りは、悟りを得ることが本来の目的ではない、と私は思っています。悟りは得られてもそれは持続しないと言われています。悟りを得ようと努めることに意義があります。つまり人格の完成を目指すこと、それが仏教の本質だということを山田無文禅師は語っています。人格の完成は、決して得られない結果ですので、まさにそこを目標に歩むことが重要となるのです。

「地誌」は一度刊行されればそれで終わりですが、「みさき百科」はインターネットの百

科事典であるウィキペディアのように、美崎のみなさんの主体的参加によって調査が行われ、それが新しく集積されていきます。この作業が美崎の「新しい祭り」となって定着していき、地域再生のエネルギーの源として、美崎の社会変革のプラットフォーム的な機能が発揮されることでしょう。そのためにも、「みさき百科 2014」につづき、2015、2016と是非継続し刊行して行ってください。そして日本やアジア世界に発信する美崎地域再生モデルの一つの柱として「みさき百科」が成長していくことを願っています。

ロバート・チェンバース 2011 『開発調査手法の革命と再生—貧しい人々のリアリティを求めて続けて—』(野田直人 監訳) 明石書店：335 ページ。

結城登美雄 2011 (2009) 『地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける—』(シリーズ 地域の再生 1) 農文協：309 ページ。

# 第1章 美崎の歴史

## 1. 美崎の成立

江戸時代の末期、幕府は裕福な町民に新田の開拓を認める制度を創設しました。これにより開拓された土地は「町人請負新田」と呼ばれますが、今の美崎の地もこの制度で開拓されました。今から二百年近く前の文化・文政の頃、江戸は京橋に大久保今助という大富豪がいましたが、その子の貞之助がこの地の開拓を願い出たと記録されています。このため、開拓された美崎の地は「今助新田」、あるいは「大久保新田」とよばれました。

貞之助は後にこの地を京都の縮緬問屋西川幸助や茂兵衛に売却します。天保10年（1839年）の検地帳では幸助らの名義になっています。その頃からは「今浜新田」と呼ばれるようになりました。

この地に最初に移住してきた人たちはそのほとんどが遠く尾張、美濃、伊勢の出身でした。新天地をこの地に求めた人たちは、天保9年（1838年）に今の阿弥陀寺の前身になります阿弥陀堂を創建します。この阿弥陀堂を中心に人々は地域的なまとまり（今風にいえば「コミュニティ」でしょうか）を持ちはじめたと考えられますので、この年をもって今の美崎が成立したといえます。そうしますと、美崎は平成26年（2014年）に176年の歴史を刻むこととなります。美崎の人たちには開放的で進取の気風がありますが、これは開拓者魂ともいえる先人の積極性と近年新しく移り住まわれた人々の新鮮な感覚があわさり形成されているといえます。

## 2. 字名（町名）の変遷

美崎地区はこれまで4回呼び名が変わっています。170年余り前に開拓された当時は、開拓者の名前をとって「今助新田村」あるいは「大久保新田村」と呼ばれますが、後に京都の西川幸助らに売却されると「今浜新田村」と呼ばれるようになります。明治8年になりますと政府の地方行政制度の整備に伴い今浜村と合併することになり、残る資料では「大字今浜の内西出」と記載されています。ただ、日常的には「今浜新田村」と呼ばれたようです。余談ながらこの合併には住民の不満が強く、明治41年には県庁に分離独立の嘆願書を提出しています。その理由として、もともと「今浜新田」は独立した村であったことや合併後の不平等な扱いなどが挙げられており、当時の地域事情を知る興味深い内容になっています。

「美崎」と改称されたのは昭和45年（1970年）に守山市が市制を施行した時からです。



### 3. 皇太神社の由来

こうたいじんじや  
皇太神社が創建された時期は確認できて  
いません。一般的には明治の初めの頃と理  
解されていますから、140～150年近く  
が経過していることとなります。以来この地  
の氏神様として人々の崇敬をあつめ、心のよ  
り所になってきました。皇太神社のご祭神は  
おおひるめのむちのみこと  
大日靈貴命（天照皇大神の別名）とされ、  
境内にはすいてんぐう水天宮、いなりしゃ稲荷社、てんまんぐう天満宮、あたごしゃ愛宕社  
の四社がおまつりされています。日本人全体



皇太神社

の氏神さまとされるあまてらすすめおおかみ天照皇大神を伊勢神宮から奉斎し、併せて水と子どもを守る神である水天宮、農業や殖産興業の神である稲荷社、学問の神である天満宮、火伏せや防火の神である愛宕社を祀り、この地の鎮めと子孫の繁栄を願った先人の深い思いが今に伝わります。

### 4. 阿弥陀寺の開山

この地に最初に移住した人たちは天保9年  
(1838年)、あみだどう阿弥陀堂を創建し、しんしゅう真宗  
ぶつこうじ はほんざんぶつこうじ佛光寺派本山佛光寺からおくられた本尊や親  
らんしょうにん鸞聖人絵像などおまつりします。その後、安  
政5年には京都のさんじょうにしぎねいそ三条西実勲の三女藤原妙  
順師がこの阿弥陀堂に入山されることになりま  
す。阿弥陀寺の山門前の石碑に安政5年開山  
と刻まれているのはこの年をいいます。なお、  
阿弥陀寺と公称されるのは明治17年とされ  
ています。



阿弥陀寺

余談ながら初期に開拓された土地の字名は謡曲からとられますが、阿弥陀堂はこれから名  
づけられた「たかさご高砂」の地に設けられました。

## 5. 大川橋

美崎グラウンドの敷地とその下流はもともと野洲川南流の一部で豊かな水流と砂浜があり、大川橋と呼ばれる橋が架かっていました。今の児童公園と大川の中の道が大川橋の位置にあたります。橋はすべて木造りで、川に打ち込まれた橋脚に橋げたを架け、橋板をわたすという素朴なものでした。橋板は固定されておらず、大雨で水かさが増すと流失しないよう取り外さなければならぬ一刻を争う危険な仕事でした。また北川地区（今の7組）の住民が孤立することからその復旧も急を要する課題でした。

一方で、大川橋から見下ろす大川は小魚が群れ泳ぐきれいな川で、橋板がガタガタと鳴る音や日差しに焼ける木の臭いととも往時を知る人たちには美崎の住民であることを思い出す忘れがたい記憶です。



大川橋

## 6. お満燈籠

この地を開拓した大久保父子は後に京都の西川幸助らに売却しますが、その幸助の子の幸兵衛は湖上交通の安全を願い湖辺に木造の灯籠を設置します。びわ湖を行き交う船の目印になったこの灯籠は人々に親しまれ、設置された地は「新田の灯籠崎」と呼ばれました（今のピエリのあたりがそう



お満燈籠



呼ばれていました)。灯籠は後に幸兵衛の子孫により石造りに建て替えられます。今、びわ湖大橋の東詰めにある石灯籠（「お満まんどうろう燈籠」と呼ばれています）は、元はピエリの敷地にあったものが移設されています。ただ、これが幸兵衛の子孫が建立したものかどうかは確認できていません。

## 第2章 美崎の特産物

## 1. 農産物の生産

野洲川南流の最下流に位置する美崎はたびたびの洪水に苦しみましたが、一方で肥沃な土壌に恵まれ古くから畑作農業が盛んで沢山の特産物を生産してきました。その歴史をたどると時代背景や人々の好みの変化が垣間見られ興味深いものがあります。

第二次世界大戦後の1950年代は食糧難の時代を背景に小麦（畑作）やサツマイモが主な生産物だったようです。また、甘いものが不足したこの時代、スイカの生産も盛んで往時を知る人は4トン車で2台分を出荷したと語ります。美崎の代表的な特産物である大根はこの頃から生産されています。

その後、1960年代になるとみつば、フキ、八つ頭イモなどいろいろな農産物が生産されはじめます。ハウス栽培が始まるのは1970年代からで、当初は規模も小さく、きゅうりやトマト、春菊などが栽培されました。

現在、美崎の最も代表的な特産物のメロンが栽培されるのは1979年からです。あわせて、メロン収穫後のハウスの活用として春菊や小松菜の栽培が盛んになり現在に至っています。

以下、美崎の代表的な特産物を紹介します。

## 2. 美崎の特産物

### ①メロン

守山メロンのブランドで販売される美崎の誇る特産物です。栽培されているのは主にアムスメロンで、消費者の評価が高く出荷されていない京阪神では「幻の守山メロン」とも呼ばれています。

メロンは北アフリカや中近東が原産のウリ科の一年生の草木植物（果実）で、日本では中世の遺跡から炭化した種子が発見されています。

### ②大根

古くからの美崎の特産物です。栽培されているのは主に青首大根で、美崎の砂地の土壌に適して、形よく、おろし、煮物、サラダなどどんな料理にも適していると市場では高く評価されています。

大根にはでんぷん分解酵素のアミラーゼや脂肪分解酵素のリパーゼなどが豊富に含まれ、昔から胃腸薬のように食されています。

大根は、エジプトのピラミッドの建設に携わった人たちが食べたとの記録があります。日本

には室町時代以降広く栽培されるようになったといわれます。

### ③小松菜

生まれは江戸。将軍徳川綱吉の好物で、原産地の小松川（江戸川区）の名をとって小松菜の名を賜ったといわれています。寒さに強く冬の最中でもみずみずしさを保っているため、雪菜とか冬菜とも呼ばれます。

小松菜は、カロチンとビタミンCを多く含み、カルシウムや鉄も豊富で骨そしょう症やガンを予防する効果があると報告されています。

美崎では、平成8年頃から栽培されるようになりました。

### ④菊菜（春菊）

キク科キク属の植物で若い葉と茎を食用にします。関東では春菊と呼ばれます。旬は11月から2月にかけてで、鍋料理に欠かせない野菜になっています。

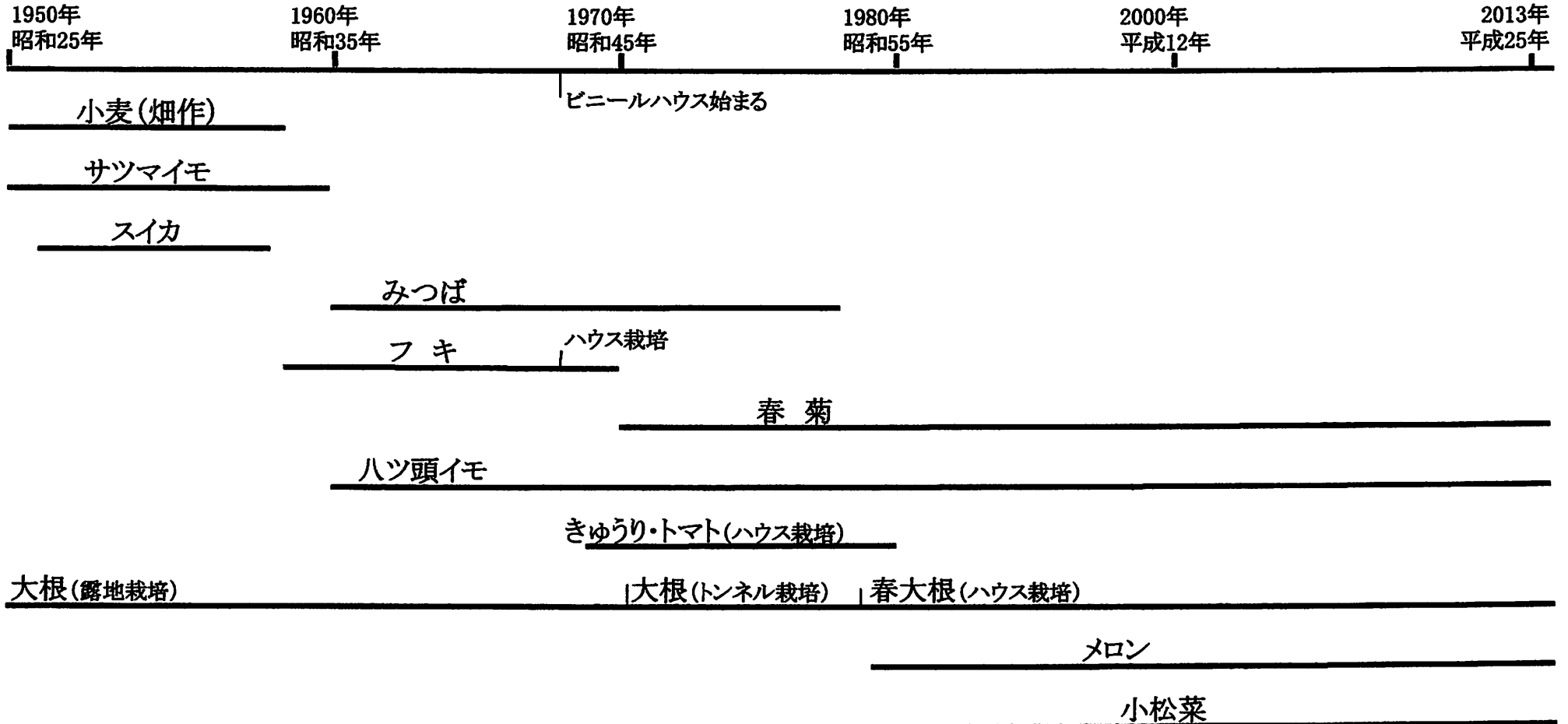
独特の香りは自律神経に作用し、胃腸の働きを整える効果があります。また、ビタミンAやカリウムの含有は野菜のなかでもトップクラスといわれます。

原産地は地中海沿岸ですがヨーロッパでは主に観賞用にされ、食用にしているのはもっぱら東洋だけといわれます。

## 3. 農業を担う人たち

美崎の農業は畑作が中心で、それゆえ幅広い年齢の人たちが生産活動を担っています。80～90代の高齢の皆さんが自家消費の野菜を栽培し、余分の産物を分け合う姿は美崎ではよくみられます。また、30～50代の若い専業農業者の皆さんが生産活動の中心を担っているのも美崎の特色です。皆さんは安心して新鮮な農産物を市場に供給するとともに、地域づくりの担い手でもあります。地域にしっかりと足をつけ、地域の基盤を支え、地域づくりの担い手として活躍いただいています。

## 美崎の特産品(農産物)



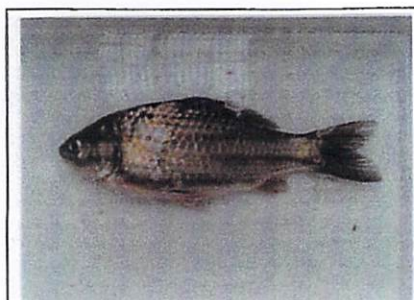
※戦後 野菜は大津・京都市場へ出荷



## 第3章 大川にすむ魚たち



### 第3章 大川にすむ魚たち (1)



**ニゴロブナ**  
琵琶湖固有種。普段は沖合の深いところに住んでいるが、産卵期になるとこのあたりに入ってくる。フナずしの原料となる魚。全長約25cm



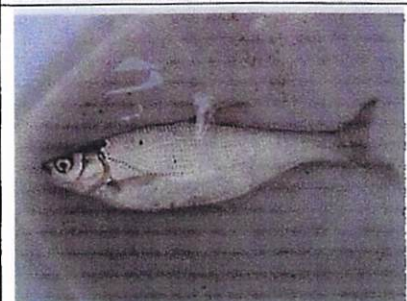
**ギンブナ**  
流れのゆるやかな深みにいる。ヒワラと呼ばれていることもある。自然界ではほとんどメスしかいない魚。全長約25cm



**コイ**  
流れのゆるやかな深みに住んでいる。大きなものでは全長1mを越すものもいる。



**ホンモロコ**  
琵琶湖固有種。煮ても焼いても天ぷらにしても美味しい魚。普段は琵琶湖沖合に住み、産卵期になるとこのあたりに入ってくる。全長10cm



**ワタカ**  
琵琶湖固有種。流れの無い場所を好み、成魚は水草を好んで食べる。産卵期の雨の日に田んぼまで入り込んで産卵することもある。近年はあまり見かけなくなった。全長30cm



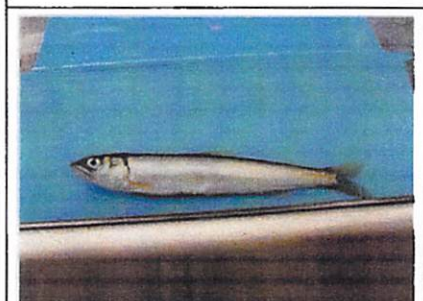
**ニゴイ**  
水の底近くに住んでいて、砂の中に住む生き物を食べやすいように下向きの口になっている。マジカという名前で呼ぶこともある。全長約30cm



**オイカワ**  
琵琶湖の沿岸から川の中流まで幅広くすんでいる。繁殖期のオスは体に鮮やかな模様ができる。全長約10cm



**ナマズ**  
体にはウロコが無く、粘液でぬるぬるしている。肉食で、他の小魚やカエルなどを食べる。夜行性で、昼間は水草の茂みや岩陰にじっとしていることが多い。全長約60cm



**アユ**  
琵琶湖の沖合でプランクトンを食べて生活するものはコアユと呼ばれ全長10cmくらいしかない。一方川に上り苔を食べるものは20cmくらいに成長する。



**ハス**  
体はオイカワに似ているが、唇がへの字に曲がり非常に特長のある顔つきになる。小魚を中心とした肉食で、啜った魚を逃がさないための進化である。全長約30cm



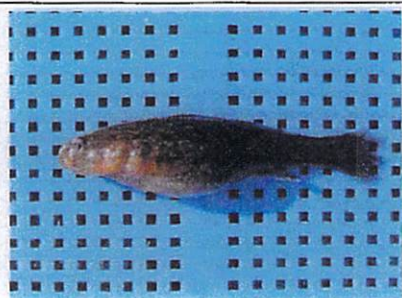
**カマツカ**  
水の底、特に砂地の場所に多く住む。驚くと砂に潜る習性があり、目だけ出して周囲の様子を見ていることも多い。全長20cm



**ヨシノボリの仲間**  
琵琶湖沖合から河川まで幅広く住んでおり、夏に琵琶湖沿岸や河川で獲れる幼魚はウロリと呼ばれ、佃煮にするとおいしい魚である。全長約7cm。写真はビワヨシノボリ。



### 第3章 大川にすむ魚たち (2)



**ヌマチチブ**  
お腹に吸盤状のひれを持ち、少しの段差なら上ることができ、川の下流から中流まで幅広く住んでいる。国内移入種である。全長8cm



**テナガエビ**  
石垣や流れのゆるやかな場所にすむ。オスは特に手が長くなり、体よりも長くなる。夜行性で、夜中懐中電灯で照らすと、目が反射して光っているのですぐにわかる。全長6cm



**スジエビ**  
透き通った体に黒い横じまが目立つエビである。泳ぎも上手で、河川から琵琶湖まで幅広く住んでいる。全長3cm

#### 外来生物

国外から連れてこられて、琵琶湖にすみついた生き物たち。帰化動物ともいう。



**カムルチー**  
肉食で、小魚や水生動物、時には水鳥の子どもも食べることがある。大川では呼吸のために水面に浮かんでいるのを見かけることがある。全長80cm



**アメリカザリガニ**  
田んぼから河川までいたるところにすんでいる。田んぼの畦に穴をあけるので、農家には嫌われる存在である。全長約15cm



**ミシシippアカミミガメ**  
小さい時は、ミドリガメと呼ばれて販売もされている。大きくなると攻撃的になり、繁殖力も強いので、大川でも増えている。全長約30cm

#### 特定外来生物

生態系、農林水産業などに被害を与える恐れがある生物。飼育や運搬、譲渡が禁止されており、違反した場合罰則もある。琵琶湖ルールでは、ブラックバス・ブルーギルは再放流も禁止されています。



**ブラックバス**  
肉食で、口に入るものなら何でも食べてしまう。卵から稚魚の間親が保護するため、繁殖力が強く漁業にも深刻な被害を及ぼす。全長40cm



**ブルーギル**  
肉食を中心の雑食性で、水生昆虫から、小魚、卵まで食べてしまう。繁殖力も非常に強く、大川でも数多く見られる。全長15cm

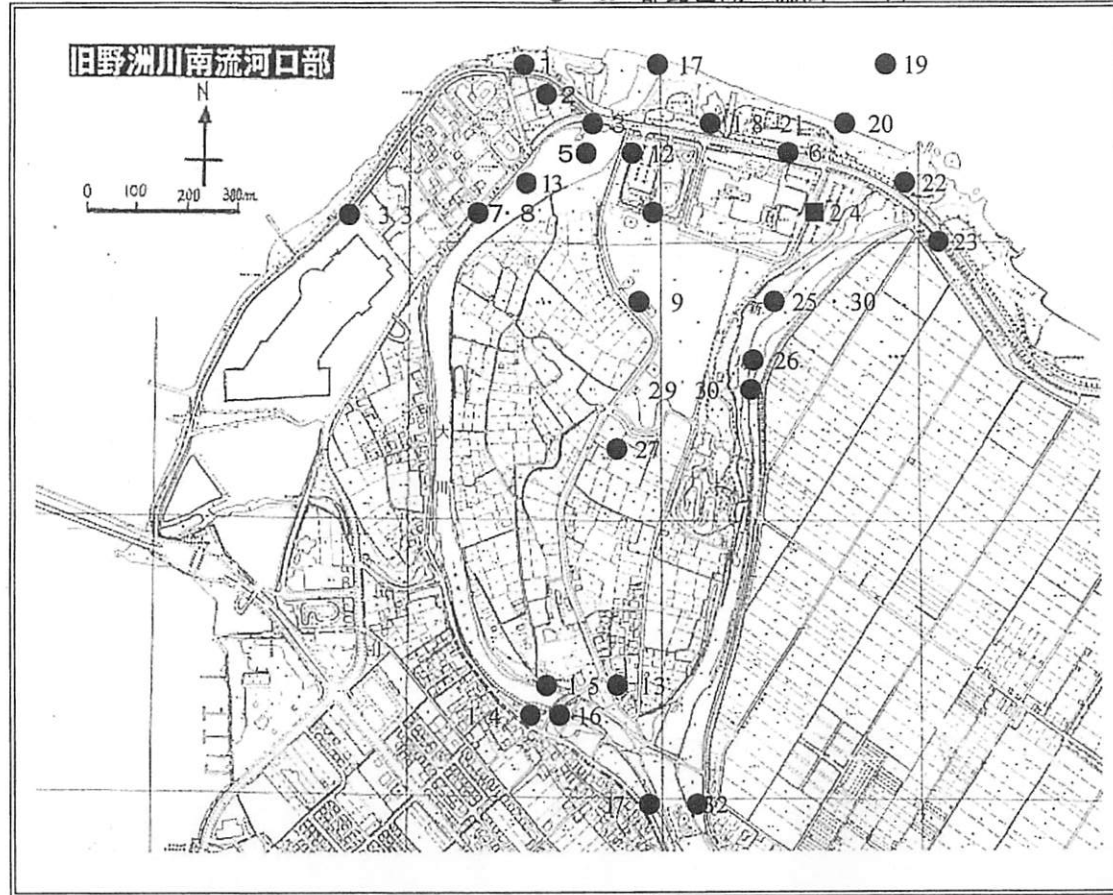


**ウシガエル**  
牛のように鳴くことから名前が付いた。食用として持ち込まれたため、食用ガエルとも呼ばれる。他のカエルや、鳥のひななど動くものなら何でも食べてしまう。全長約15cm



## 第4章 大川の水草と植物

- 1 ハマヒルガオ群生地
- 2 カンザキハナナ・
- 2 ヒマワリ生育地
- 3 大川樋門
- 4 湖岸道路 (さざなみ街道)
- 33 湖岸堤
- 5 準用河川大川
- 6 在来種のタンポポトウカイタンポポ生育
- 7 センダン大木生育
- 8 ムクロジ大木生育
- 9 テーダマツ生育
- 10 ホテイアオイ群生
- 11 フサジュンサイ繁茂
- 12 1000m ボーリング
- 調査跡地・湧き出る温水(温泉)と温泉掘削地
- 13 オオフサモ繁茂
- 14 美崎のサクラ並木
- 15 昭和40年水害土手一等陸尉頌徳碑
- 16 大川橋落橋
- 17 中野美崎道路改良工事
- 17 ヨシ群落の景観とヨシ群落保全区域  
ヨシ・マコモ・ヒメガマ・ヤナギ類の生育
- 18 県営都市公園 野洲川河口湖岸緑地 (日本の渚百選選定地) (日本の都市公園百選選定地)
- 19 都琵琶湖の漁法 エリ
- 20 なぎさ公園水泳場 夏季7・8月
- 21 クロマツ防風林・テーダマツ混生
- 22 新川樋門
- 23 湖岸道路 (さざなみ街道)
- 24 美崎公園駐車場
- 25 準用河川新川
- 26 市営都市公園 美崎公園 (みさき自然公園)
- 27 日本最大 湖成三角州
- 28 ヨシ・マコモ・ヒメガマ群生
- 29 ミクリ・タコノアシ・コガマなどの貴重種
- 30 フサジュンサイ繁茂 オオフサモ繁茂
- 31 ヤナギ大木(アカメヤナギ・タチヤナギ)
- 32 県道今浜水保線 道路改良工事



野洲川南流跡河口部周辺の自然・生活環境の見どころ



# 大川水域のおもな水生植物

画像撮影 中村一雄



ヨシ・抽水植物



マコモ・抽水植物



ウキヤガラ・抽水植物



貴重種

ミクリ・抽水植物



ヒシ・浮葉植物



シロネのなかま・湿生植物



特定外来生物

オオフサモ・抽水植物



この類には特定外来生物有り

アゾラ類・浮遊植物



大川から既に姿を消している可能性

オオカナダモ・沈水植物



大川から既に姿を消している可能性

コカナダモ・沈水植物



青い悪魔・百万ドルの雑草の  
異名・アレロパシー有り

別名 ウォーターヒヤシンス

ホテイアオイ・浮遊植物



金魚藻で親しまれる

別名 ハゴロモモ

フサジュンサイ・沈水植物



キショウブ・抽水植物



キシュウスズメノヒエ・抽水植物



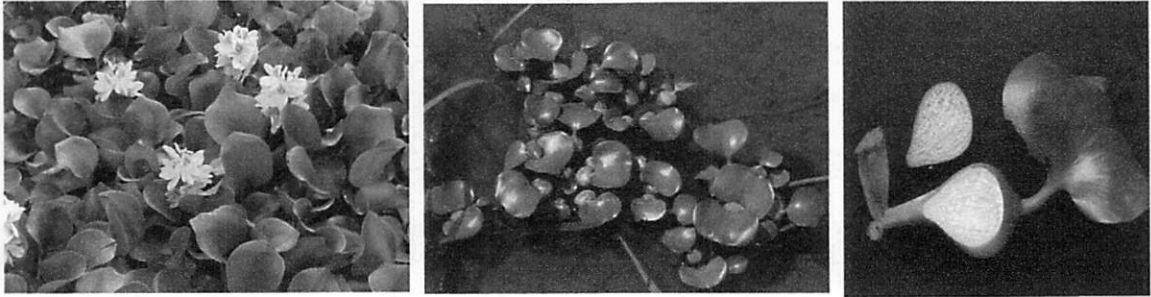
チクゴスズメノヒエ・抽水植物



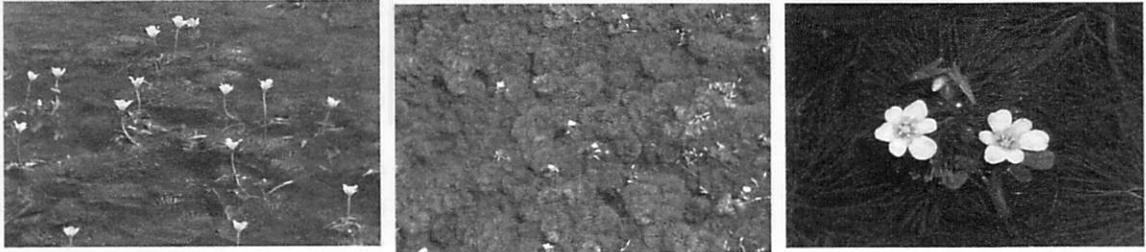
## 大川とその周辺で気になる水生植物

ホテイアオイ・南アメリカ原産・浮遊植物

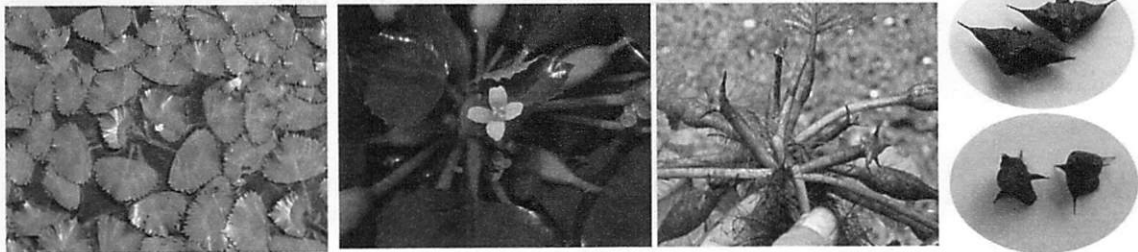
・「青い悪魔」の異名 別名「ホテイソウ」「ウォーターヒヤシンス」



フサジュンサイ(ハゴロモモ)・北アメリカ原産・沈水植物

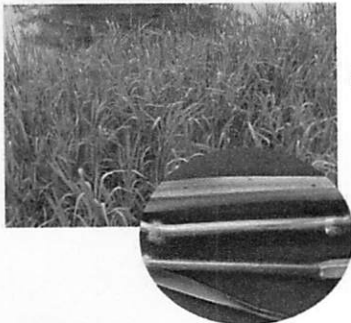


ヒシ・オニビシ・浮葉植物



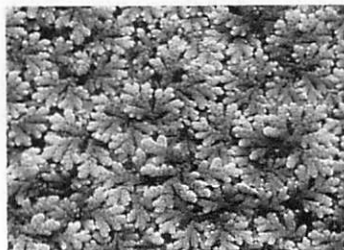
水底から水中に茎を伸ばす・オニビシは忍者のまきびしで知られる。

チクゴスズメノヒエ・半抽水植物



近縁にキシウ  
スズメノヒエ

外来性アゾラ類・浮遊植物  
アカウキクサのなかま



オオフサモ(特定外来生物)

ブラジル原産・抽水植物

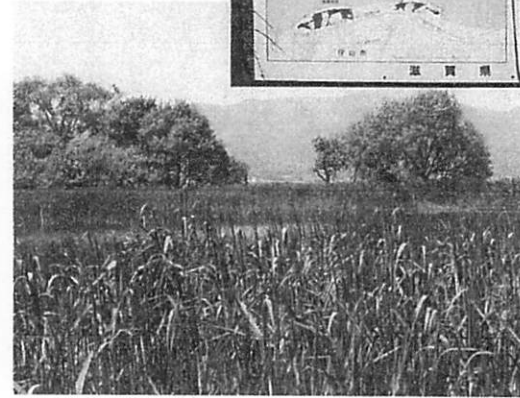




野洲川河口湖岸緑地の琵琶湖岸に広がるヨシ群落



ヨシ群落の景観 「ヨシ群落」とはヨシだけを指すのではない



ヨシ群落のだいじさ 滋賀の環境(滋賀県)から

ヨシ群落の働き

- ①生態系の保全  
様々な生物が生息している場であり、生態系上で最も重要なところ です。
- ②野鳥の生息環境の保全  
野鳥の産卵場や、餌場、ねぐらなど、生息にとって欠かせない場所です。
- ③水産資源の保護  
魚の産卵場や稚魚の隠れ場、餌場として大切な場所です。
- ④湖岸の浸食防止  
湖岸に打ち寄せる波の強さが押さえられ、湖岸の浸食を防止するのに役立っています。
- ⑤水質の保全
  - 水の流れがヨシにあたって弱まることによって、水中の汚濁物質の沈殿が促進されます。
  - ヨシの水中茎についている微生物が有機物を分解します。
  - ヨシ自身が窒素やりんなどの栄養分を吸収します。

ヨシ群落保全条例の制定

平成4年(1992)

「滋賀県琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例」(正式名称)

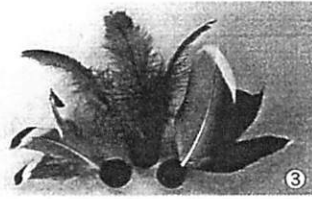
ヨシ群落保全基本計画

平成16年(2004)

条例にこめる三つの柱

- ①ヨシを守る
- ②ヨシを育てる
- ③ヨシを活用する

- ① ムクロジの木
- ② 成熟した実
- ③ 種子を利用した羽根
- ④ 羽子板



# 自然に遊ぶ

《7》  
中村一雄

今浜町の湖畔大川沿いには、湖辺特有の樹木センダングサに混じって一本のムクロジ（ムクロジ科）の木が観察できる。この辺りではムクという呼び名で親しまれているが、正しくは「ムクロジ」である。市内にはムクノキ（ニレ科）という樹

もあるので誤解のないようにしてほしい。  
ムクロジは落葉高木で秋に写真のような径20mmくらいの果実を実らせる。夏から秋にかけて果実は緑色から淡黄色へと変化し、成熟すると表面に網目状の凹凸が見られる。わずかに鈴状

に粘つく果皮を手で剥くと、径15mm弱の硬くて丸い黒色の種子が一つ現れる。昔はお正月にこの黒い種

子をビー玉のようにして遊ぶ。昔はムクロジの種子に竹ひごを刺し、その先に鳥の羽根をつけたものを、板を使って空中高く放って遊んだとされ、このようすをト

## 子らの息災願って

### ムクロジ(無患子)

## 種子・羽根突き玉

美崎公園パークセンターでは、12月に羽子板・羽の手作り講座を開催した。関心をお持ちの方があ

れ、12月に羽子板・羽の手作り講座を開催した。関心をお持ちの方があ

れ、12月に羽子板・羽の手作り講座を開催した。関心をお持ちの方があ

れ、12月に羽子板・羽の手作り講座を開催した。関心をお持ちの方があ

みさき自然公園指導員  
(毎月一回掲載)

守山市民新聞連載記事  
「もりやまの自然に遊ぶ」

執筆 中村一雄

湖辺特有のセンダン大木



黄金色に色づくセンダンの実



淡紫色の可憐な花

# 自然に遊ぶ

《19》

中村一雄

口付近に数多く見られる。かつての野洲川を偲ばせる樹木であり、湖辺地域の開発が進んでも、ぜひ残してほしい樹木でもある。

新緑の鮮やかな5月から6月にかけて緑の葉っぱ

がある。落葉後も2月頃まで実が目立っているのが、本市湖辺地域の名物樹木・

センダンは昔は「あふち(棟)」という名前で呼ばれていたことがあり、この名前前で万葉集にも歌われている。また、唱歌「夏は来ぬ」の歌詞にも登場する。なお、みなさんもよくご存じの「センダンは双葉より芳し」の格言があるが、ここでのセンダンはビヤクダン科のビヤクダン(白檀)を指し、今回紹介しているセンダンとはまったく別物であるので要注意。センダンは名前のうえてやや紛らわしい樹木でもある。

## 旧野洲川しのぶ樹

### 湖辺地域にセンダン

## 冬の果実「金鈴子」

昨年の本紙新春号では、この時季、成熟した淡黄色の実が見事な「ムクロジ(無患子)」を紹介した。落葉高木のムクロジは本市湖辺地域では大川沿いに唯一の樹木があるが、この周辺にはムクロジに負けず劣らず見事な黄金色の実を鈴なりにつける落葉高木「センダン(梅檀)」が多く生育している。

冬季、見上げるような大木の大きく広がった枝に落葉後も黄金色の実を群がってつけているセンダンの光景は圧巻である。「金鈴子」の愛称で親しまれる冬のセ

ンダンの観察に足を運んでほしいものである。センダンは本県では湖辺地域に特有の樹木である。本市では今は廃川の、旧河川野洲川南流の今浜町の河

全体に多数つける。樹が大きいだけにその姿はたいへん見応えがある。花期にはぜひともセンダンの花見物を楽しんでほしい。参考までに野草にセンダ

みさき自然公園指導員  
(毎月1回掲載)

守山市民新聞連載記事  
「もりやまの自然に遊ぶ」

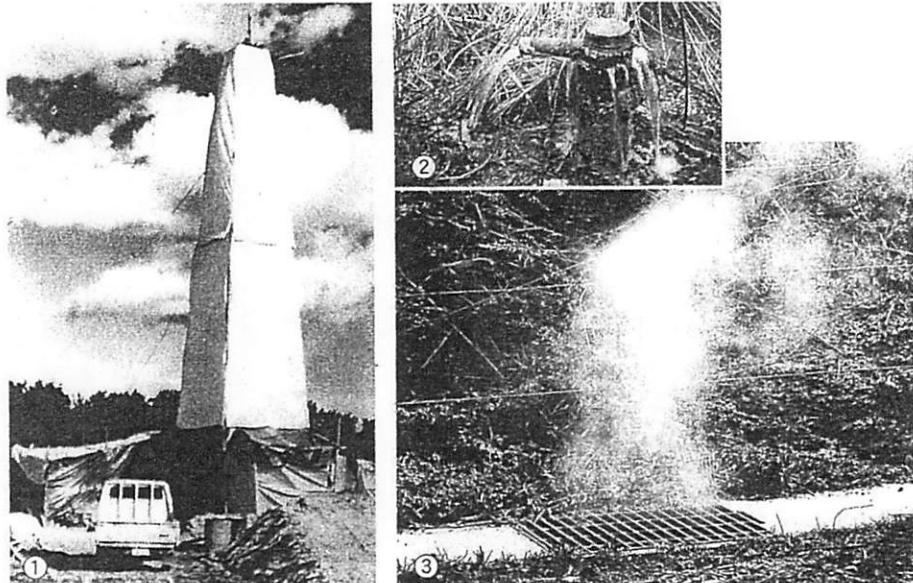
執筆 中村一雄

# 自然に遊ぶ

《6》 中村一雄

の堆積物は、およそ30万年くらい前のものであることが柱状資料から判明している。詳しくは市立教育研究所編「守山の土地のなりたちを探る」や「守山市誌 自然編」などを参照されたい。

最近ではこのあたりの整備も進み、写真②のような光景を見ることは出来ないが、湧出する温水の様子は道路沿いの側溝に伺うことができる。冬季にはしばしば道路横の側溝のグレイチンクから湯煙が立ち上っていることがある(写真③)。地下の奥深いところから地表に温水が湧出していることを想うと、そこには琵琶湖畔の地下の様子に夢を馳せることが出来る。ちなみに11月のある日、気温18度のときに地表では水温33度を記録した。



昭和50年(1975)年から51年にかけて、「地球の歴史を探る」という研究目的のもとに、阪大、京大をはじめ全国から来た多くの大学の共同研究者による、ボーリング調査が今浜町の琵琶湖畔で行われた。現在の大河河口部東側、湖岸道路から僅かに南へ入った、かつてのみさき公園跡地である。(写真①)

調査は地表から地下1000mの深さまでパイプを打ち込み、地下の様子を探ろうという計画で、俗に「1000mボーリング」と称されていた。

実際には945mの長さに入らなかつたため、深さでは調査の成功をおさめたボーリング跡地を活用して温泉掘削工事が行われ、昭和51年6月に毎分百20リットルの湧出(自噴)に成功したことが報じられている。

## 今浜の湖畔に湯煙

### 研究ボーリング跡地

## 地下深く温水湧出

824mだったといわれている。調査結果から、このあたりの湖畔の地下ではこれだけの深さまで土砂が堆積層を形成し、いちばん深い所

写真②は昭和55年、教育

みさき自然公園指導員 (毎月一回掲載)



守山市民新聞連載記事  
「もりやまの自然に遊ぶ」

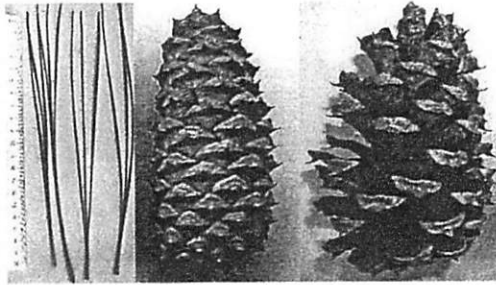
執筆 中村一雄



まつぼっくりが目立つ  
水際のテイクマツ



なぎさ公園松林（右側の  
高木はテイクマツ）



テイクマツの葉とまつぼっくり

# 自然に遊ぶ

《25》

中村一雄

いよいよ本格的な夏の到来、本市琵琶湖岸は水や涼を求める人たちが賑わい始めている。毎年、湖畔のなぎさ公園（野洲川河口湖畔緑地）では夏季、市が水泳場をオープンし、今年もこの18日には市観光協会による浜開きが行われる。

を醸し出している。今回、この地の樹木環境のなかから、その主流である

日本産のクロマツとはなんとなく樹相の感じが違うので、注意して見渡せばすぐ

が特徴である。年間、多くの人がこの公園を訪れているが、テイクマツに気付いている人は案外少ないように思われる。

## 北米原産の三葉松

### 湖辺水域のテイクマツ

## 背高く無数の球果

この場所は、日本の都市公園百選やなぎさ（渚）百選に選定されているなど、この時期、琵琶湖の蒼い水、浜辺の白い砂、ヨシ群落保全区域に指定されているヨシ原と湖岸道路路際まで広がる防風林の松林の緑などが風光明媚なすばらしい景観

るクロマツに混じって一際目を引くちよつと変わった松の仲間を紹介したい。北アメリカ原産のテイクマツというマツ科マツ属の常緑高木針葉樹である。原

に気がついていただけだと思う。浜辺の水際にも育っていて、球果（まつぼっくり）をいっぱいつけている姿は印象的である。もう少し身近に観察すれば、テイクマツにも出会ってほしいものである。

日本地衣学会会員  
（毎月一回掲載）

## 第5章 大川周辺に飛来する鳥たち



第5章 大川周辺に飛来する鳥たち (1)

みさきでよく見られる鳥たち (1)














			
<p><b>カイツブリ</b> (留鳥) 新川で浮き巣をつくって子育て中 詩歌に歌われる「鳩の海」(びわ湖)の鳩(にお)とはこの鳥のこと</p>	<p><b>カルガモ</b> (留鳥) いつも親子連れだっとなかよく泳ぐ。新川上流のヨシ原をめざして いっしょうけんめい逃げている</p>	<p><b>オオバン</b> (留鳥) バンに似るがくちばしから顔にかけて白い。足指にはひれがあり、 もぐることも得意。</p>	<p><b>バン</b> (留鳥) 黒いからだに赤と黄色のくちばし、 赤い顔が特徴の水鳥。水かきはな いが緑色の足で泳ぐことはできる</p>
			
<p><b>カンムリカイツブリ</b> (留鳥) 冬のびわ湖にスラリと白い首を伸 ばすこの鳥が夏に黒い冠羽とほお に赤い飾り羽をつける姿は見事。</p>	<p><b>キンクロハジロ</b> (冬鳥) 目は金色、からだは黒色、羽は白 色で名前が「キンクロハジロ」。 後頭部に黒く長い冠羽</p>	<p><b>マガモ</b> (冬鳥) オスは首から頭は緑色、くちばし が黄色く首に白い輪がある。メス はからだ全体が褐色</p>	<p><b>コガモ</b> (冬鳥) 最も小さいカモ。オスは赤茶色の 顔で目から後ろに緑色の帯がある みさきには一番早く渡ってくる。</p>
			
<p><b>ハシビロガモ</b> (冬鳥) からだに不釣り合いなくらいの広 く大きくくちばしをもち、英名でも 「ショベラー」</p>	<p><b>ヨシガモ</b> (冬鳥) 赤紫色と光沢ある緑色の頭。尾羽 が藁のように長く垂れ、別名「み のがモ」</p>	<p><b>ホシハジロ</b> (冬鳥) オスは頭から首が赤茶色で、か らは灰色。胸とお尻が黒い。目は 赤い。水に潜る。</p>	<p><b>コリカモメ</b> (冬鳥) 冬の湖上に群れる白い姿はコリカ モメ。5月には覆面をしたような黒 い顔に変身。</p>
			
<p><b>オカヨシガモ</b> (冬鳥) もっとも地味な感じのカモで、おし りの黒い三角形が特徴。みさきには 頻りにすがたをみせる。</p>	<p><b>ウミアイサ</b> (冬鳥) オスの頭部は緑色光沢のある黒 色で、頭頂から後頭部にかけて 長い冠羽がある。</p>	<p><b>ヒドリガモ</b> (冬) ⇒⇒⇒ オスは頭から首にかけて赤褐色、 額から頭頂まで黄色い帯がある。 春まで留まり・・・</p>	<p>⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒⇒(春先) 春になったらムラサキサギゴケの 咲く広場で群れになって青草をつ いばみ、やがて北へ飛び立つ。</p>

美崎公園パークセンター(参考:守山の野鳥ガイドブック)



## 第5章 大川周辺に飛来する鳥たち (2)

### みさきでよく見られる鳥たち (2)

			
<p><b>オオヨシキリ</b> (夏鳥)</p> <p>口を大きくあけると真っ赤なのが見える。ギョギョシケケシギョギョシと高らかになわばりを宣言する。</p>	<p><b>アオサギ</b> (留鳥)</p> <p>水辺に静かに立って、じっと何かをみつめる姿がよく見られる。ねらいは……</p>	<p><b>カワセミ</b> (留鳥)</p> <p>このカワセミが新川になわばりを張っている。魚にねらいをつけて水中に飛び込む。</p>	<p><b>セキレイ</b> (秋～春)</p> <p>セグロセキレイは黒い顔に白いマユ、ハクセキレイは白い顔に黒いマユ。他にキセキレイは胸が黄色</p>
			
<p><b>キジ♂ キジ♀</b> (留鳥)</p> <p>ケーンと声はよく聞く日本の国鳥。ヒナを連れた雌は敵に気づくとケガを装って自分に敵を引き付ける</p>	<p><b>ムクドリ</b> (留鳥)</p> <p>田んぼや草原で虫やミミズをついばんでいた群れが、日暮れ前、一斉にヨシ原へ帰る。</p>	<p><b>ヒヨドリ</b> (留鳥)</p> <p>ビーヨ、ヒーヨと鳴くので「ヒヨドリ」。羽を閉じて波形にとぶ。灰色ボサボサ頭に茶褐色のほお</p>	<p><b>カワウと白鷺とカメとオオハシ</b></p> <p>新川河口で一堂に会える。ダイサギ、チュウサギ、コサギを総称して「白鷺(シラサギ)」と呼ぶ</p>
			
<p><b>アカゲラ</b> (留鳥)</p> <p>木の幹にたてにとまり、自分で穴を掘って巣をつくる。普通にいう啄木鳥(キツツキ)とはこのアカゲラ</p>	<p><b>コゲラ</b> (留鳥)</p> <p>「ギューツ」と鳴く。キツツキの間は木をくちばしてたたく「ドラミング」でなわばりを主張する。</p>	<p><b>モズ</b> (留鳥)</p> <p>長い尾をピコンピコンとよく振るモズは鳴きまね上手で「百舌」と書く。右はモズのハヤニエ。</p>	<p><b>カワラヒワ</b> (留鳥)</p> <p>スズメによく似ていて、どこでも普通にみられる。飛ぶと翼に太い黄色の帯が目立つ。</p>
			
<p><b>ホオジロ</b> (留鳥)</p> <p>鳴き声が「一筆啓上つかまつり候」「源平つじ白つじ」と聞きなしたをされることでなじみが深い。</p>	<p><b>ジョウビタキ</b> (冬鳥)</p> <p>翼に三角形の白い紋(模様)が特徴。「紋付」とよばれる。オスの羽は黒く、胸は濃い橙色。</p>	<p><b>シジュウカラ</b> (冬鳥)</p> <p>黄緑かった背で、のどから腹にかけての黒い帯がネクタイのようツブツビーと明るくさえる。</p>	<p><b>ツグミ</b> (冬鳥)</p> <p>常に胸を張って堂々たるポーズで数歩進んでは立ち止まり、進んでは止まるという動作をくりかえす。</p>

美崎公園 パークセンター (参考: 守山の野鳥ガイドブック)



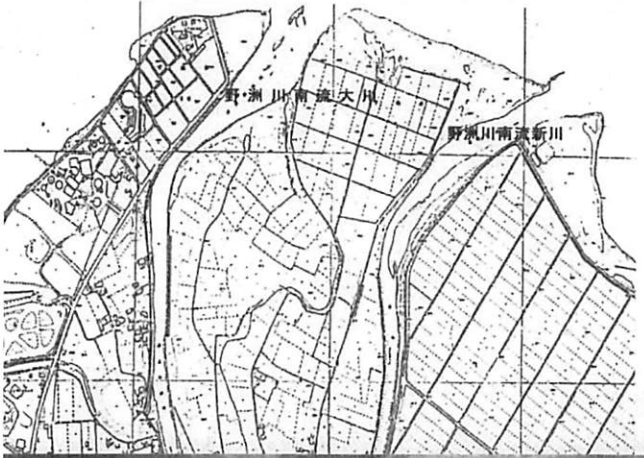
## 資料編

資料 1. 旧野洲川南流河口部の移り変わり

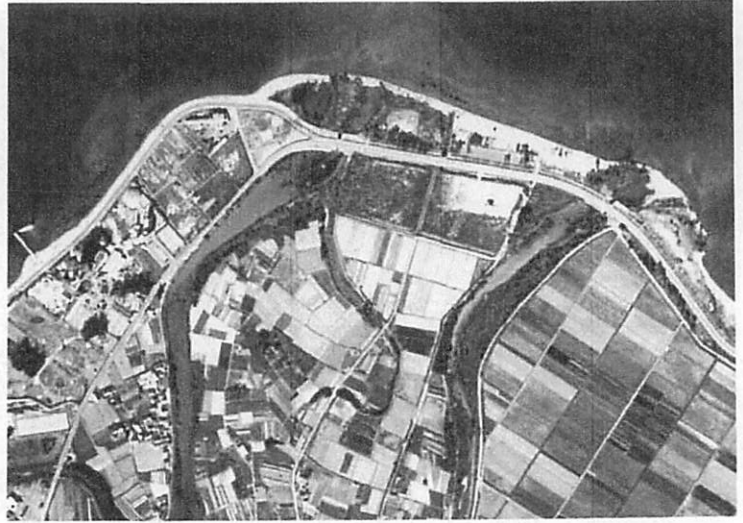
資料 2. 水質データ（守山市調査データ）

資料 3. 年表でみる美崎の歴史

# 旧野洲川南流河口部の移り変わり



昭和50年  
1975



昭和57年  
1982



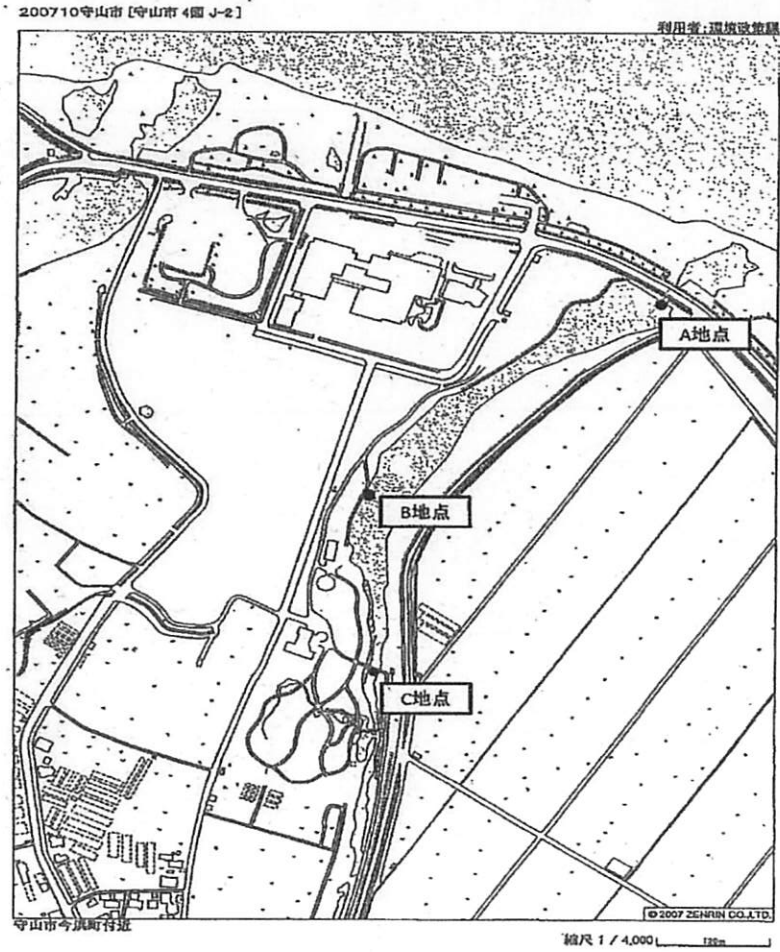
現在



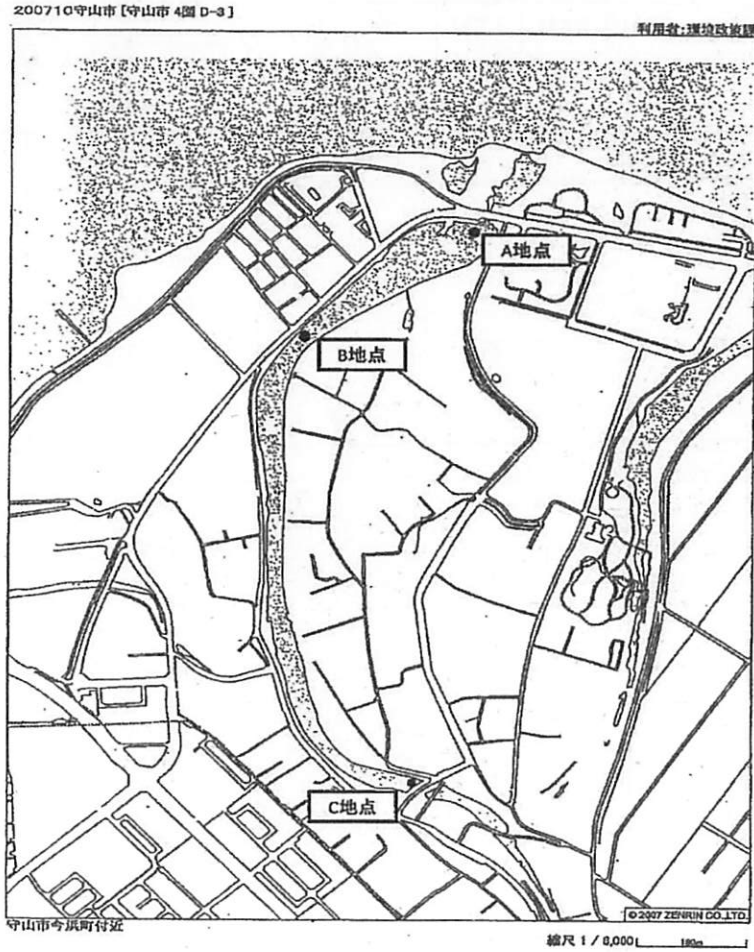


採水場所

新川採水地点



大川採水地点



## 【春季】

【水質調査、経年変化&lt;春季比較&gt;】(大川・新川)

	調査地点	上流 (C地点)					中流 (B地点)					下流 (A地点)				
		項目\年度	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24
大川	pH			6.8	6.5	7.1			6.9	6.4	7.2			7.0	6.6	7.4
	BOD (mg/L)			7.1	4.7	9.6			3.5	4.5	6.8			2.4	2.7	2.3
	COD (mg/L)			15	6.6	12			11	5.9	6.3			6.7	6.0	6.4
	SS (mg/L)			21	13	26			14	24	14			12	11	11
	DO (mg/L)			4.4	4.8	5.9			3.6	6.7	4.9			3.7	7.5	5.3
	T-N (mg/L)			2.0	1.49	1.1			2.0	0.92	1			1.6	0.69	0.93
	T-P (mg/L)			0.2	0.148	0.13			0.3	0.086	0.067			0.1	0.082	0.032
新川	pH															
	BOD (mg/L)															
	COD (mg/L)															
	SS (mg/L)															
	DO (mg/L)															
	T-N (mg/L)															
	T-P (mg/L)															

(参考：採水日)

平成 23 年度 H23.5.26

平成 24 年度 H24.5.30

平成 25 年度 H25.6.3

	上流					中流					下流				
	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25
大川			D	D	E			D	D	D			D	B	B
新川															

別表1による評価結果まとめ

## 【夏季】

【水質調査、経年変化&lt;夏季比較&gt;】(大川・新川)

	調査地点	上流 (C地点)					中流 (B地点)					下流 (A地点)				
	項目\年度	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25
大川	pH	7.0		6.9	6.2	6.8	7.0		7.1	6.2	6.9	7.1		7.3	6.5	7.1
	BOD (mg/L)	1.9		14	10	6.6	2.2		8.7	3.7	2.1	1.3		2.8	4.2	2.6
	COD (mg/L)	8.6		13	10	9.1	7.5		16	7.4	6.1	6.6		9.6	8.4	6.3
	SS (mg/L)	12		31	29	13	6.0		13	8.5	4.6	1.8		9.2	13	4.8
	DO (mg/L)	3.8		4.3	6.0	8.7	4.8		5.6	4.2	5.8	2.2		4.7	6.4	5
	T-N (mg/L)	1.6		4.2	2.3	1	0.55		2.6	0.84	0.65	1.5		1.9	0.67	1
	T-P (mg/L)	0.094		0.40	0.46	0.19	0.049		0.18	0.077	0.063	0.029		0.14	0.066	0.068
新川	pH	7.2		6.9	6.6	7	6.9		6.9	6.5	7	7.2		7.1	6.6	7
	BOD (mg/L)	20		2.6	6.1	15	4.9		2.7	3.6	3.2	2.3		3.4	7.9	4
	COD (mg/L)	18		6.7	10	16	9.5		8.5	9.2	8	8.5		10	9.5	10
	SS (mg/L)	23		9.8	23	24	19		10	19	9.4	7.9		16	14	13
	DO (mg/L)	14		2.9	4.1	6.7	4.7		2.9	5.9	5.1	7.7		4.2	6.0	4.3
	T-N (mg/L)	4.5		5.9	2.0	2.6	2.4		4.9	2.4	2.6	1.2		3.0	2.1	1.3
	T-P (mg/L)	0.29		0.40	0.23	0.39	0.19		0.29	0.27	0.18	0.058		0.017	0.14	0.23

(参考:採水日)

平成 21 年度 H21.8.19

平成 23 年度 H23.8.8

平成 24 年度 H24.8.2

平成 25 年度 H25.8.12

	上流					中流					下流				
	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25
大川	D		×	E	D	D		E	D	B	D		D	C	B
新川	×		D	D	E	D		D	C	C	B		D	D	C

別表1による評価結果まとめ

## 【冬季】

【水質調査、経年変化&lt;冬季比較&gt;】(大川・新川)

	調査地点	上流 (C地点)					中流 (B地点)					下流 (A地点)				
	項目\年度	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25
大川	pH		7.2	6.8	6.7	—		7.3	7.1	6.7	—		8.1	7.4	6.8	—
	BOD (mg/L)		3.6	1.4	3.2	—		2.4	1.4	3	—		4.6	1.5	3.4	—
	COD (mg/L)		6.8	9.4	4.6	—		6.6	8.6	4.4	—		9.8	7.5	5	—
	SS (mg/L)		13	14	6.5	—		9.5	10	6	—		11	7	8.5	—
	DO (mg/L)		7.2	6.5	6.4	—		8.8	8.5	6.3	—		13	10	8.9	—
	T-N (mg/L)		1.4	2.4	1.9	—		1.1	2.0	1.1	—		1.2	1.6	1	—
	T-P (mg/L)		0.083	0.16	0.07	—		0.067	0.13	0.066	—		0.078	0.068	0.059	—
新川	pH		7.1	6.9	6.9	—		7.1	6.8	6.9	—		7.6	7.0	6.8	—
	BOD (mg/L)		1.5	3.4	5.1	—		3.4	2.0	8.8	—		2.7	1.9	4.1	—
	COD (mg/L)		5.8	8.1	4.5	—		8.8	7.4	6.8	—		8.0	7.5	5.2	—
	SS (mg/L)		6.1	6	11	—		12	3	15	—		5.5	6	5.5	—
	DO (mg/L)		5.3	2.1	5.9	—		7.6	2.3	8.3	—		9.9	6.6	6.7	—
	T-N (mg/L)		1.4	4.6	2.6	—		1.2	3.0	2.3	—		0.53	1.5	0.8	—
	T-P (mg/L)		0.056	0.27	0.29	—		0.085	0.10	0.19	—		0.096	0.064	0.04	—

(参考：採水日)

平成 22 年度 H23.2.9

平成 23 年度 H24.2.16

平成 24 年度 H25.2.19

平成 25 年度 H26.2月予定

	上流					中流					下流				
	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25	H21	H22	H23	H24	H25
大川		C	B	C	—		B	A	C	—		C	A	C	—
新川		B	D	D	—		C	D	E	—		B	B	C	—

別表1による評価結果まとめ



(別表1) 【【生活環境の保全に関する環境基準 (河川)】】…環境庁公示「水質汚濁に係る環境基準について」より

項目 類型	利用目的の 適応性	基準値					(参考) 該当河川
		水素イオン 濃度 (pH)	生物化学的 酸素要求量 (BOD)	浮遊物質量 (SS)	溶存酸素量 (DO)	大腸菌群数	
AA	水道1級、自然環境保全 及びA以下の欄に掲げる もの	6.5以上 8.5以下	1mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	7.5mg/ℓ 以上	50MPN/ 100mℓ以下	四万十川
A	水道2級、水産1級、 水浴及びB以下の欄に掲 げるもの	6.5以上 8.5以下	2mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	7.5mg/ℓ 以上	1,000MPN/ 100mℓ以下	利根川 最上川 北上川
B	水道3級、水産2級及び C以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	3mg/ℓ 以下	25mg/ℓ 以下	5mg/ℓ 以上	5,000MPN/ 100mℓ以下	石狩川 多摩川
C	水産3級、工業用水1級 及びD以下の欄に掲げる もの	6.5以上 8.5以下	5mg/ℓ 以下	50mg/ℓ 以下	5mg/ℓ 以上	-	荒川 住吉川
D	工業用水2級、農業用水 及びEの欄に掲げるもの	6.0以上 8.5以下	8mg/ℓ 以下	100mg/ℓ 以下	2mg/ℓ 以上	-	寝屋川
E	工業用水3級、環境保全	6.0以上 8.5以下	10mg/ℓ 以下	ごみ等の浮 遊が認めら れないこと	2mg/ℓ 以上	-	

## 【用語説明】

<u>自然環境保全</u>	自然探勝等の環境保全
<u>水道1級</u>	ろ過等による簡易な浄水操作を行うもの
<u>水道2級</u>	沈殿ろ過等による通常の浄水操作を行うもの
<u>水道3級</u>	前処理等を伴う高度の浄水操作を行うもの
<u>水産1級</u>	ヤマメ、イワナ等貧腐水性水域の水産生物用並びに水産生物用並びに水産2級及び水産3級の水産生物用
<u>水産2級</u>	サケ科魚類及びアユ等貧腐水性水域の水産生物用及び水産3級の水産生物用
<u>水産3級</u>	コイ、フナ等、 $\beta$ -中腐水生水域の水産生物用
<u>工業用水1級</u>	沈殿等による通常の浄水操作を行うもの
<u>工業用水2級</u>	薬品注入等による高度の浄水操作を行うもの
<u>工業用水3級</u>	特殊の浄水操作を行うもの
<u>環境保全</u>	国民の日常生活（沿岸の遊歩等を含む。）において不快感を生じない限度

水素イオン濃度 (pH)

水生生物に安全な pH は 6.8~8.5 とされており、pH が 7 のときに中性、7 を超えるとアルカリ性、7 未満では酸性を示す。

浮遊物質 (SS)

一般的に、数値が高いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中に浮遊または懸濁している直径 2 mm 以下の粒子状物質の量を示す。

数値が高いと、水が濁り外観が悪くなるほか、魚類のえらがつまって死んだり、水中植物へ光が届かず発育を妨げる。

溶存酸素 (DO)

一般的に、数値が低いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中に溶けている酸素の量を示す。

数値が低いと、水の浄化作用を低下させ、水生生物が窒息死する。

一般的に、魚が生存するためには 3mg/l 以上が必要で、2mg/l 以下では悪臭物質が発生するとされている。

生物化学的酸素要求量 (BOD)

一般的に、数値が高いほど、水質の悪化を意味するとされており、水中の有機物が微生物の働きによって分解される  
ときに消費される酸素の量を示す。

数値が高いと、溶存酸素 (DO) が欠乏しやすくなり、10mg/l以上で悪臭の発生等がみられる。

(参考) 水生生物の生息域 (出典：公害防止の技術と法規編集委員会編、公害防止の技術と法規 水質編)

BOD (mg/L)	魚水	底生生物	備考
<u>2.5 以下</u>	イワナ、ヤマメ アブラハヤ、カジカ	ヒラタカゲロウ類 カワゲラ類、ナガレトビケラ類 ヘビトンボ、サワガニ プラナリア	
<u>2.5～5</u>	ウグイ、カマツカ タナゴ類、シマドジョウ ヨシノボリ	コカゲロウ類 コガタジマトビケラ ヒタラドロムシ、ハバヒロビル モノアラガイ、ヌマエビ	
<u>5～10</u>	フナ類、コイ タモロコ、モツゴ オイカワ、ドジョウ	ミズムシ、シマイシビル ヒメタニシ	弱い硫化水素臭はない
<u>10 以上</u>	普通はいない	イトミミズ、赤色ユスリカ ホシチョウバエ、サカマキガイ	ほとんどの場合、強い硫化水素 臭が認められる。
さらに水が汚れると、目で見える生物はいなくなる。			

大腸菌群数

大腸菌及び大腸菌と性質が似ている細菌の数を示す。し尿汚染の指標として使われている。

全窒素 (T-N)

有機性窒素化合物および無機性窒素化合物に含有される窒素の総量を示し、数値が大きいほど汚濁していることを意味する。水系を富栄養化させ、赤潮の原因となるため、富栄養化の程度を表す指標の一つである。

全リン (T-P)

リン化合物全体の総量を示し、数値が大きいほど汚濁していることを意味する。水系を富栄養化させ、赤潮の原因となるため、上記の全窒素と同様、富栄養化の程度を表す指標の一つである。



年表でみる  
美崎の歴史

年号	西暦	美崎の出来事	日本と守山の出来事
文政年間	1818 ～1829	○江戸の富豪大久保今助が 今浜の湖岸を開発して一 村を形成(町民請負新田) ・今助新田と呼ぶ	・11代将軍徳川家斉の時 代
天保5	1834	○近江国野洲郡今浜地先大 久保新田で検地 ・字名は謡曲の高砂・養老・ 阿漕・八島・羽衣・巻絹・ 三輪・梅枝・錦木などから とられ113筆との記録 ・名義は今助の子の貞之助 ・反別24町3反6畝18 歩、石高109石3斗9升 5合	・江戸・大阪で打ち壊し
天保8	1837	○今浜新田西高入新田で検 地	・大塩平八郎の乱
天保9	1838	○高砂に阿弥陀堂が創建	・二宮尊徳が小田原藩の財 政改革に着手
天保10	1839	○今浜新田亥高入新田で検 地 ・検地帳には京都の縮緬問屋 西川幸助と安川茂兵衛の 名義で新田が成立したと 記載 ・この頃までに大久保は西川 らに今助新田を売却した と思われる	
天保12	1841	☆美崎に残る明治41年に 作成された文書には、天保 12～13年頃に多羅尾代 官所が今助新田を公売に 付し、西川らが購入して今 浜新田に改称したと記載	

資料3. 年表でみる美崎の歴史

天保13	1842	○今浜新田寅高入新田で検地	・幕府の苛酷な検地に対し、甲賀・栗太・野洲で農民一揆（天保義民一揆）
嘉永6	1853	○今浜新田で検地 ・この年の検地帳には、天保5年からの19年間に32町19反9畝26歩が開発されたと記録	・ペリー来航。 ・この年、近江一円は大旱魃
安政5	1858	○京都の三条西実勲の三女藤原妙順師が阿弥陀堂に住す	・井伊直弼が大老に就任 ・徳川家茂が将軍に就任
文久2	1862	○湖上交通の安全を願い、西川幸兵衛が石造灯籠を建立。西川幸助が建立した木製灯籠を再興したもの ○この地は新田の「灯籠崎」と呼ばれる	・寺田屋事件発生
明治初年	1868～	○これまでに28戸が入植。遠くは尾張・美濃・伊勢、県内では高島・東浅井・坂田の各郡、近隣の諸村から入植 ○皇太神社創建	
明治5	1872		・県に区制が施行され、速野は野洲郡8区に編成
明治6	1873	☆美崎に残る明治41年に作成されて文書には、明治6年に新田住民が西川等から土地を買い受けたとあり、住民23名の氏名と生国が記載	
明治7	1876	○今浜村に広明学校が開校（今浜、水保） ○阿弥陀寺に栗太郡岡の乗円寺から武村了順師入寺	

資料3. 年表でみる美崎の歴史

明治 8	1875	○今浜村と今浜新田村が合併して今浜村になり、新田地区は「今浜ノ内 西出」と呼ばれる	
明治 9	1876	○広明学校が観湖学校に改称	
明治 10	1877		・西南戦争
明治 12	1879		・村ごとに戸長役場が設置
明治 17	1884	○阿弥陀寺と公称	
明治 18	1885		・連合戸長制により洲本・木浜・水保・今浜が合併 ・洲本の照久寺台所に洲本村連合役場が設置
明治 19	1886	○観湖学校は尋常科今浜小学校に改組	
明治 22	1889		・町村制施行により速野村が誕生。洲本の己爾乃神社の由緒に「速野庄己爾野」とあることから「速野村」と称す
明治 23	1890		・当時速野村の人口は3971人、戸数は736戸
明治 41	1908	☆この年「大字復旧請願書」を県に提出 ・今浜村から独立をして一村を興したいとの内容(当時の村の事情がわかる資料)	
明治 42	1909	○西川幸助が灯籠を再建。前の建立は文久2年	
大正 2	1913	○藤原光閣氏、私立記念藤原文庫を創設。大正天皇即位記念	・翌1914年、第一次世界大戦始まる
大正 6	1917	○台風で野洲川が氾濫。今浜新田堤が決壊し、近辺地域に大被害	
大正 9頃	1920	○岐阜、名古屋、四日市から	・最初のメーデー開催



資料3. 年表でみる美崎の歴史

		10人足らずの入植者。養蚕を始める	
大正11	1922	○この年、大かんばつで野洲川南北流の水争いおこる	
昭和5	1930		・守山駅～木の浜間の定期バスが営業開始
昭和13	1938	○梅雨前線により野洲川が出水。今浜新田の堤防が決壊し、人家、田畑に大きな被	
昭和19	1944	○今浜新田六番川堤防が決壊	
昭和22	1947	○8月に大川橋流出 ○9月の大出水で田畑が流出	
昭和23	1948		・速野村農協が県下初の農協として発足
昭和30	1955		・守山町が誕生 ・当時の人口は24,774人 戸数4749戸
昭和31	1956	○台風15号による洪水で今浜新田堤防決壊。人家、田畑流出	
昭和34	1959	○伊勢湾台風で大川橋流出。今浜新田堤防決壊。床上浸水1.5mに及ぶ	
昭和36	1961	○集中豪雨で大川橋流出。野洲川下流堤防決壊	
昭和39	1964		・琵琶湖大橋開通
昭和40	1965	○台風24号により今浜新田堤防14ヶ所で決壊。大川橋・新川橋流出 ・死者1名。田畑流出の被害大	
昭和45	1970	○ホテルレイクピワ竣工	・守山町が市制を施行
昭和46	1971	○台風2号の来襲で野洲川南流の堤防決壊	

資料3. 年表でみる美崎の歴史

昭和47	1972	○野洲川出水で今浜新田の堤防決壊。田畑の冠水は20町歩に及ぶ	
昭和54	1979	○阿弥陀寺本堂落慶	・野洲川放水路通水式挙行
昭和55	1980	○皇太神社本殿改築	
昭和56	1981		・野洲川改修にかかる南北流を締め切り
昭和58	1983	○阿弥陀寺山門落慶	
平成22	2010	○皇太神社拜殿改築	

出典：守山市誌、「大字復舊請願書」およびその付属書類

注：水害の記録は、「今浜新田」や「大川橋」と記録されているもののみを記載  
記載以外に、今浜、水保、洲本での洪水記録は多数あり

## おわりに

大川活用プロジェクトでは「寄り合い」と名づけた定例会議を毎月一回開催しています。年齢も、経験も、所属もばらばらなメンバーが集い、夜の2時間余りを大川の現状や将来、子ども達の未来、市北部地域の活性化、東南アジアとの生活比較などなどの話し合いを楽しんでいます。この「みさき百科」の発行もその話し合いの中から出てきました。

「寄り合い」では新しい提案や発想に「ノー」の声は出ません。大抵の提案には「それ面白そう。やってみようよ」となります。そんな中で手がけた「みさき百科」ですが、準備不足もあり章ごとの内容や記載が不ぞろいであるなど不十分な出来に留まっています。しかし、小さな自治会を単位にしたこのような冊子が編集されること自体が地域づくりの新しい一歩ではないかと思い勇気をもって発行することにしました。今後ご覧をいただいた皆様のご意見・ご要望もいただきながら内容を充実して名実ともに「百科」に値するものにしたいと考えています。

なお、この冊子の編集にあたり次の皆さんに多大のご協力をいただきました。

京都大学東南アジア研究所安藤和雄さん、立命館守山高校八木良明さんと Sci-Tech クラブ生物班の皆さん、守山市関係課の皆さんです。

記してお礼を申し上げます。

平成26年1月

「みさき百科」編集委員会  
(美崎自治会大川委員会有志)



## 参考図書

守山市誌 資料編歴史年表（平成14年12月発行）	守山市
同 歴史編（平成18年3月発行）	守山市
守山市史（昭和49年12月発行）	守山市
日本史要覧（1980年3月発行）	（株）文英堂
きょうの料理大百科（1994年10月発行）	日本放送協会
からだに効く食べ物365日（1999年6月発行）	（株）SSコミュニケーションズ

本冊子の制作において以下の協力を得ました。

- ・ 守山市役所
- ・ 京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
- ・ 京都大学 地の拠点事業（KYOTO未来創造拠点整備事業－社会変革期を担う人材育成）

**みさき百科 2014 —大川とその周辺の自然と社会—**

発行日：平成 26 年 3 月 31 日

発行：美崎自治会

編集：「みさき百科」編集委員会（美崎自治会大川委員会有志）

編集協力：安藤和雄（京大東南アジア研究所）・小野寺佑紀（レカポラ編集舎）

出版協力：京都大学 地（知）の拠点事業（KYOTO 未来創造拠点整備事業 — 社会変革期を担う人材育成）、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室、守山市役所